

審査の結果の要旨

氏名 金田 渉

本研究は、思春期精神医学において重要な疫学的課題である夜尿と注意欠如多動性の関連について、一般住民思春期前期児童の地域代表大規模サンプルを用いて検討したものである。すなわち、他の行動上の問題(情動・行為・友人関係)および強さ(向社会的行動)を調整した上でも、夜尿と注意欠如多動性には独立した関連が見られるかどうか明らかにすることを試みている。

本研究から、下記の結果が得られている。

1. 夜尿を呈するのは研究参加児童(10.2歳)の9.2%であった。夜尿児童の少なくとも86.7%は、DSM-IV/5の定める夜尿症の診断基準を満たさなかった。
2. 夜尿群は非夜尿群と比べて、有意に高い注意欠如多動性の点数を示し、その差の効果量は中程度であった( $p < .001$ , Hedge's  $g = 0.39$ )。
3. 潜在的交絡因子(性別・年齢・知能指数・低出生体重児・両親の教育歴)で調整した上でも、夜尿と注意欠如多動性は有意に関連していた。ロジスティック回帰モデルにおいて、夜尿の有無に対する注意欠如多動性(0-10点)のオッズ比は1.15(95%信頼区間 1.09 - 1.20,  $p < .001$ )であった。
4. 潜在的交絡因子に加えて、他の行動上の問題(情動・行為・友人関係)および強さ(向社会的行動)を調整した上でも、夜尿と注意欠如多動性の間には、独立した有意な正の関連が確認された(ロジスティック回帰モデル, オッズ比 = 1.11, 95%信頼区間 1.05 - 1.17,  $p < .001$ )。
5. 以上の結果は、夜尿症の診断基準を満たす可能性がある児童を夜尿群から除いて感度分析を行った場合にも、ほとんど変化しなかった。

本論文は一般住民思春期前期児童において、他の行動特性(情緒・行為・友人関係の問題、向社会的行動)を調整した上でも、夜尿は注意欠如多動性と独立かつ正の方向に関連していることを初めて明らかにしたものである。注意欠如多動性へのスクリーニングおよび心理社会的サポートのような、臨床場面における夜尿症治療のさまざまなエビデンスを、医療機関を受診しない思春期前期の夜尿児童に対しても適用し得る可能性が示唆されている。以上の点は、思春期児童の精神的健康についての重要な貢献と言える。よって、本論文は学位の授与に値するものと考えられる。